

氏名	竹崎 一真		
学位の種類	博士（体育科学）		
学位記番号	博乙第	3035	号
学位授与年月	令和 4 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	戦後日本における身体美文化に関する系譜学的研究 －美容体操／ボディビルを通じた主体化に着目して－		
主査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭
副査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副査	筑波大学教授	博士（体育科学）	深澤浩洋
副査	国際基督教大学上級准教授	博士（社会学）	有元 健

### 論文の内容の要旨

竹崎一真氏の博士学位論文は、第二次世界大戦後の日本における女性と男性の理想的身体としての身体美の形成過程を「美容体操」と「ボディビル」という身体美文化の言説の編成を分析・考察することで明らかにしたものである。その要旨は、以下のとおりである。

#### （目的）

本研究は、第二次世界大戦後の日本における「美容体操」と「ボディビル」というふたつの身体美文化の形成過程において、身体をめぐる言説がどのように編成されていくのかを系譜学的に捉えることを目的としている。

#### （対象と方法）

著者は、理想的なものとして存在する身体のあり方が、様々な権力関係によって構築される社会的構築物と捉え、身体文化の「由来」と「現出」を記述するミシェル・フーコーの権力に関する系譜学的アプローチをもとに分析している。すなわち、「美容体操」や「ボディビル」がどのような背景によって出現したのか（由来）、そして、それらの身体の上で繰り広げられる日本とアメリカのふたつの異なる文化の衝突がどのような交渉を生み、戦後日本の身体美文化として位置づくようになったのか（現出）を明らかにしている。

## (結果)

著者は、第1部「女性身体美文化の形成と主体化」において、第3章「生活革命と女性解放：『八頭身』はいかに生まれたのか」で、「八頭身」という言説・身体イメージがどのような社会的文脈から生じたのか、その歴史的背景を再構成しつつ、戦後の女性たちにとって「八頭身」のもつ意味を考察し「八頭身」の由来を探求している。そして、第4章「美容体操の登場と女子体育改革」では、女性が身体美を追求するという行為がいかに女性たちの規範的行為として位置づけられていったのか、すなわち身体に権力が刻み込まれていく具体的なプロセスとして美容体操を論じている。さらに、第5章「女性解放運動としての身体美文化：身体の獲得と男性社会への抵抗」において、身体美という記号が女性解放の文脈のなかに位置づけられていく様相が示されている。

第2部「男性身体美文化の形成と主体化」では、第6章『「男らしさ」のためのボディビルー男の敗戦経験とその回復』において、日本のボディビル文化が形成されるその中心にいた主要人物たちの語りから、ボディビルという男性身体美文化がどのような過程を経て生じたのか、すなわちボディビルが出現した由来を明らかにしている。そして、第7章「揺れ動く日本のボディビル」では、メディアを通じてボディビルが大衆化され始めて以降、ボディビル界の組織的な動き、ボディビルをめぐる組織内外の言説の動きを分析することから、ボディビルというアメリカ的身体がナショナリズムの影響を受けて言説的な変化を見せたと考察している。つまり、アメリカ的身体とナショナリズムの身体との間隙において、新たな男性身体の言説が創出した過程を分析している。著者は、この観点をさらに探求し、第8章「三島由紀夫とボディビルー格闘する主体」では、戦後を代表する文学者であり、ナショナリストと評される三島由紀夫を取り上げ、三島がボディビルを行うことによって、右派的ナショナリズムの意識を獲得した事実、すなわち三島がアメリカ的身体を欲望することを通じて、ナショナリズムを発露し、その身体が戦後日本を生きる人々に欲望されるようになったと分析することから、ボディビルを通して三島が、アンビバレントな主体意識を獲得したと述べている。

## (考察)

著者は、戦後日本の身体美文化は八頭身や逆三角形といったアメリカ的な身体美の理想を追い求める身体実践の文化として生起したが、人々が身体の美しさを求めたのは、それが敗戦によって大きな打撃を受けた人々の希望となったからであり、軍国主義下での画一的な身体像から脱するにあたって、アメリカ的な身体美を求めることになったと考察している。すなわち、身体を美しくすること、言い換えれば身体をアメリカ的身体へと近づけることが、支配者である「アメリカ」に近づくと同時に、日本を再生させることにつながると考えられたとした。

しかし、一方で著者は、そうした文化の形成過程において、「日本人」はその身体になることに「不向きである」、あるいは「なってはならない」という言説が前景化していた事実を踏まえ、アメリカ的な身体美が日本人の人種性やジェンダーと一貫性をもつことのない身体実践であるとの認識が形成されていたことを示すものだとしている。つまり、身体美文化が完全に「アメリカ」に擬態するものではなく、アメリカと日本のふたつのコンテクストの中を揺れ動きながら、新たな主体を立ち上げる文化として生起したと述べている。

そして著者は、女性解放運動家たちの語りや三島由紀夫のボディビル実践とその後の行動を分析

することから、身体美を通して、身体に対する悲観的な態度を消し去り、家父長的かつ人種的な抑圧に閉じ込められた身体を開放し、戦後の新たな時代を生きる主体を作り出す方向を生み出したとしている。すなわち、占領期の日本において、身体美文化がある面で文化帝国主義的な権力関係から生じたものとして捉えられるものの、一方で身体美文化が新たな主体を立ち上げる言説を生み出す文化空間となり、それゆえに様々な言説が生まれ、戦後を生きる人々の歩みを方向づける一つの試金石となったと結論づけている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、ミシェル・フーコーの身体の系譜学を理論的基盤とし、女性及び男性の理想的身体としての身体美の形成過程をそれらの言説編成を分析・考察することで明らかにした点で評価される。そして、それらが身体に対する外的な権力作用のみならず、様々な事象を踏まえてジェンダーや人種、ナショナリティとかかわりあいながら、主体的に構築されていくものであることを示したことは、身体文化研究にとって新たな視点をもたらしたものと評価できる。

令和4年1月26日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。